別記様式第21号（第32条第２項関係）

最終試験の結果の要旨

報告番号	保研　第　28　号		氏　名	中村　篤
審査委員	主　査	窪田　正大		
	副　査	簗瀬　誠	副　査	大重　匡
	副　査	永野　聡	副　査	山下　亜矢子

主査及び副査の５名は、令和４年１月２５日１６時から１７時にかけて、学位請求者中村篤氏に対し、論文の内容について質疑応答を行うと共に、関連事項について試問を行った。

具体的には、以下のような質疑応答がなされ、いずれについても満足すべき回答を得ることができた。

質問１）垂水市では運転免許返納で何らかの公共交通機関のチケットや割引などはあるのか。
（回答）垂水市でもそのような取り組みはあると聞いている。

質問２）代替え手段を利用することでも結果は変わってくると考えられるのか。
（回答）自治体によってそのようなサービスは異なるので、高齢者の状況も変化すると考えられる。

質問３）限界でも述べているが、２群間の違いの割合は、他の研究でも同じぐらいなのか。
（回答）他の研究で見ても運転中断者は同じぐらいで、割合が１０％を超えるものはなかった。

質問４）今回の調査は、横断研究であるため、運転中断が影響したのか否かはわからないと思うが、年齢に差がある。身体的フレイルの割合の差は、通常と同じ程度であるのか。
（回答）７０歳代であれば１０％程度である。

質問５）公共交通へのアクセスが悪かったということが運転をやめたことの結果を改善できなかったという先行研究があった。運転するということ自体が身体的または精神的に良い影響を与えると考えることができるのか。
（回答）ADOCにはドライブが趣味の項目に入っており、聞き取りをしている中で選択される方も多くいた。そのため、運転自体が生活の満足度などを満たす要因の一つであると考えている。

質問６）今回の研究結果を生かすとすれば、運転に代わるようなアクティビティや楽しみを見つけるということに意味があると考えているのか。
（回答）運転群では仕事/教育が多く選択された活動であったが、運転中断によってこの活動ができなくなるということが考えられるため、この活動を何に置き換えるか、またどうやって継続できるのかということ検討する必要があると考えている。

質問７）限界にも述べられており、他の調査でも同じようなサンプルサイズとのことであったが、今回の研究でこのような割合になったことについての原因は何だと考えるか。
（回答）垂水市だけが運転中断群が多いということではなく日本の先行研究で運転群が多い割合となっているので、どの地域においてもそのような差が出てくると考えている。

質問８）対象者は会場にどうやって足を運んだのか。会場には足を運びやすい人が参加したということになるのか。

（回答）垂水市の公民館や施設を利用したため、徒歩、バスや自家用車で来場している。参加者に対し送迎バスなどは準備していないためご指摘いただいた懸念は可能性の一つとした考えられる。

質問９）中断群は高齢かつ女性が多い結果となっているが、この結果はどのような点に影響をおよぼしているのか。例えば教育歴など、女性の比率の影響はどのように考えるか。
（回答）教育歴などへの影響に加え、重要とする活動として選択された活動にも影響はあるかもしれない。そのため、性別による影響を排除するために女性のみで解析を行った。

質問１０）日常生活では様々な筋力を使うが、握力を筋力の指標として使用するのは妥当なのか。
（回答）筋力については、身体的フレイルの判定に握力が使われており、妥当だと考える

質問１１）抑うつとアパシーは非常に近い関係があると思うが、今回は差が異なっている。その原因は何だと考えるか。
（回答）アパシーはGDS-15の下位項目を使用したので、抑うつとは関係が深いとは考えるが、はっきりとした原因はわからない。今後検討が必要な課題だと考える。

質問１２）認知機能低下の人がいるが、確実なデータをお返しするときに工夫された点はなにか。
（回答）自分自身が直接データを返したわけではないのではっきりとはわからない。

質問１３）欠損データがでないようになど確実な研究データを得るために何か工夫はあるのか。
（回答）聞き取り実施前にレクチャーを開催したり、当日も質問方法を確認したりした。

質問１４）高齢者はアパシーの割合が多いと思うが、今回の対象者と一般の高齢者との割合の違いはあるのか。
（回答）一般の高齢者の割合は確認できていないが、社会的フレイルで有意差が出たことを考えると外に出たくないなど意欲が低下していることもアパシーに影響を及ぼしていると考える。

質問１５）今後どのような活動を取り組むかということが大事になってくるかと思う。垂水市のバックグラウンドを考慮した上で、近所で行われる社会参加活動は具体的にどのようなものが適していると考えているか。
（回答）今回の聞き取り調査では、加工所で働く方が多い印象を受けた。そのような活動を長く継続できるような支援や参加が難しくなった場合には、そのような経験が活かせる作業工程が分かれ本人の強みが生かせるような取り組みを提供できれば良いと考える。

質問１６）免許を持っているけど運転していない人は、周囲が止めているのかそれとも自分で客観的に捉えて更新をしていないのか。それが結果に影響することもあるのではないか。
（回答）今回の調査においては、「なぜ運転をしていないのか」といった詳細な理由については聞き取りを行っていない。

質問１７）県警に配属された作業療法士がいて認知機能低下や認知症の方に助言していると聞いたことがあるが具体的な役割などを把握しているか。
（回答）具体的にどのような関与をしているかは十分に把握していない。しかし、本研究の結果から、日常生活において今後自身の生活の中で運転をどうしていくかという計画に関与することも今後の作業療法士の役割の一つとして重要であると考えている

以上の結果から、５名の審査委員は本人が大学院博士課程修了者としての学力と識見を充分に具備しているものと判断し、博士（保健学）の学位を与えるに足る資格をもつものと認めた。